

# 戦争日記

50期生

## I テーマ設定の理由

時は3年前の1995年10月25日、私は小学校最高の思い出となる広島・山口への修学旅行に行きました。もちろん、広島ではその時からちょうど50年前に落とされた原子爆弾のことを学びました。その中で、一番強烈な印象があった出来事があります。それは、韓国人原爆犠牲者慰霊碑の前で、ムクゲの種を手にお話してくれたおじさんとの出会いです。「この碑の後ろには、ムクゲとサクラが交互に植えてあります。ムクゲに韓国を表し、サクラは日本を表します。この木たちには、韓国人と日本人が本当に仲良くなれることを願って植えられたのですよ。だから、みなさんもこのムクゲの種を学校に植えてみて下さいね。」このおじさんのお話は、私たちに過去を見つめ、未来に生かすことを教えて下さいました。今回は、このことを思い出し、もう1度、改めて戦争を見つめ直そうと思い、このテーマを設定したのです。

## II 研究方法

- (1) インタビュー 修学旅行先の「乗鞍」と地元の「大阪」とで、戦争体験者にお話を聞き、まとめる。又、それらを比較する。
- (2) 文献調査 本は参考程度にとどめ、新聞記事を主に集め、現在や未来の戦争に関する問題について考えた。

## III 研究内容

### 1. インタビュー in 乗鞍

#### (1) 乗鞍とは

乗鞍とは、長野県の西の端、南北では真ん中のほぼ岐阜県との県境に位置する、乗鞍岳（標高3,026m）のふもとの高原のことです。我が附中は毎年、そこへ修学旅行に行っています。又、「ピーポロ乗鞍」という宿はTVドラマにも出たので、知っている人も多いのではと思います。名物はそばに高原牛乳にミズパショウ。又、白樺の木が多くあり、自然が多いし、空気もおいしくて、とてもよいところですよ。

#### (2) 福島さんへのインタビュー

私が、乗鞍でお話をうかがったのは、旅館「福島屋」の福島吉勝さんです。1998年5月28日の1時ごろから旅館の庭にある桜の木の下でベンチでお話をうかがいました。



▲図1 長野県の地図

①子供のころ

夏だけ山の上の大野川という部落（世帯数約100戸）で暮らし、ソバを作っていました。冬は、家がほったて小屋というのがふさわしいくらいのもので、山の厳しい寒さを防げなかったので、山を下りていました。

小学校は大野川にあり、そこに通っていましたが、中学校は遠い松本にしかなく、下宿しなければならなかったので、あきらめました。だから、勉強したのは小学校の間だけです。

小学校を出てから18才までに、農業や養蚕などの家の仕事を手伝い、18才から5年間は、島々という地区の郵便局に集配人として務めていました。

②徴兵検査

21才の時、徴兵検査を受けました。

「甲種、乙種、丙種とあって、甲種が一番いい。これは体格などで決める。甲種は、2年間軍隊に入って訓練し、その後家で待機し、戦争が始まったらすぐに戦えるようにしておく。乙（丙）種は、甲（乙）種が足りなくなった時に、召集令状で呼ばれ、軍隊に入る。私は、今もだけれど昔もひょろひょろで、筋肉薄弱で、乙種だった。」

③軍隊入隊

昭和12年7月7日、清事変（＝満州事変）が始まりました。それがどんどん拡大して兵が足りなくなり、乙種も必要となりました。召集令状が届き、昭和13年10月1日に宇都宮の連隊に入りました。

「陸軍には、歩兵（小銃、機関銃、小型の砲などを使い、徒歩で戦う）、騎兵（馬ののって攻撃する）、砲兵（大砲を使って攻撃し、友軍の戦闘を有利にする）、工兵（土木、建築、鉄道、通信などの技術的任務につく）、輜重丙（軍隊のために食料などの物資を運ぶ）があって、その中でもわしは砲兵になって大砲を運ぶ御者になった。大砲をあつかう人もいたけどな。最初は馬に乗る練習。まず、裸馬で、上手くなったら鞍付きに乗る。降りおとされないように必死でしがみついたら、鞍に当たっている部分がすれてすごく痛い。そこに、アカチンをぬったら、ヒリヒリしみて、がまんできないほどになる。こんなことを毎日続けるのやから、とてもつらかった。」

こうして練習し、仕事が板に着きはじめたころ、急に工兵にならされました。「慣れない手作業をすると、手に水ぶくれがたくさんできて、それがつぶれるととても痛くて痛くて……。」

福島さんは結局、終戦までずっと軍隊にいました。



▲写真1 福島吉勝さん



▲図2 福島屋周辺図

このように福島さんはかなり熱心に長い間お話して下さいました。前に、自分の戦争体験をまとめたそうで（私もその原稿を見せてもらいましたが、文体がとても難しく、読めませんでした）、とてもスラスラと語って下さいました。

又、私の中で、とても印象に残っているものがあります。正確な時間や、周辺の出来事はよくわからなかったのですが、前ページでは除きましたが、福島さんは、こんな事をおっしゃっていました。

「あいつは本当にかわいそうやった。かわいそうやった……。」

たぶん、殺された戦友のことを思い出していたのでしょう。目にうっすら涙を浮かべていらっやいました。

戦争体験者の多くは、福島さんのように知人を殺されるという悲しい思い出を持っていることと思います。しかし、殺されることは悲しく、恨めしいという感情を持ちながら、自分が知らないからといって、多くの隣人（朝鮮や中国の人々など）を殺したのは事実です。なぜなのでしょう。

(3) 中原さんのお話

福島さんには、生い立ちを中心に戦争体験を語っていただきましたが、乗鞍と大阪の戦争下での状況を比較するにあたっての話を補うため、附中生が泊めていただいている、ビーボロ乗鞍のご主人、中原貞夫さんにお話をうかがいました。

①生活の中で

◦窓にかいこのむしろ（カーテンがなかったので）をかけていた。

◦裸電球にかぶせ布をしていた。

これらは、よく話に聞く、灯火管制（敵に場所を知らせないようにして、空襲をさけるために外へあかりをもらさない）である。

◦防空壕を学校に掘り、訓練した。

◦学校では、奉安礼（天皇がまつられている）に頭を下げて登下校した。

◦小学校5・6年生の時に、農兵隊（兵隊の食事を作る）に志願したり、6・7才の子供も、兵隊を見送ったりした。

◦家にあった金属を供出した。（武器・兵器を作る金属が足りなくなったため。中原さんのお宅では2個あった風呂釜のうちの1つを。）

②軍隊の侵入

◦近くに、研究所（兵隊の訓練所）があり、飛行機訓練のための滑走路（現在ではスカイラインに）があった。

◦白樺の木の皮をはぐ。（これは後ほど取り上げます）

④意識

◦あまり戦争という意識はなく、かろうじて上記のことで意識を保っていた。

ということで、私の予想通り、あまり庶民の生活までは、戦争が浸透していなかった。

### 〈白樺の皮はぎ〉

私が一番乗鞍らしい戦争の話だと思ったのはこれです。乗鞍にはいたるところに白樺の木がはえています。その名の通り、幹が白いので、ふつうの木とは気品が違い、周りの緑に映えて、とても美しい世界をかもしだしています。ところで、そんな白樺と戦争との関係ですが……。

戦中、乗鞍に何人か兵隊さんが来て、白樺の木の皮をどんどんはいていきました。たぶん、ほとんどすべて、はいでしまったでしょう。そして彼らは、そこに大きなかまどを作り、その皮を加工して行って、何やら作り始めました。それは、燃料です。飛行機を飛ばすための燃料です。1枚の皮からできる燃料はほんの少しです。いくら、全部はいでも、それだけの燃料で飛行機はどれだけ飛ぶか……そこまでする必要があったぐらい、日本では何もかも、戦うためのものでさえも不足していました。なのに、戦争をやめなかったのです。なぜでしょう？



指輪、つり鐘などの釜蓋をさしだすことをもとめた。  
▲図3 供出のポスター

## 2. インタビュー in 大阪

### (1) 大阪とは

みなさんには説明をするまでもないと思います。我が附中がある所、人情のあふれる町、大阪。

### (2) 松原さんへのインタビュー

私が、大阪での戦争状況を知るためにお話をうかがったのは、松原<sup>たもつ</sup>さん（72才）です。現在は奈良市にお住まいですが、昔は大阪の中心、梅田に住んでいらっしゃいました。

#### — 松原さんの戦争体験 —

### ① 壮丁検査

松原さんは、昭和20年1月10日、19才の時に検査を受けました。普通は20才で徴兵検査を受けるはずですが……

「壮丁検査で19才のもんを。いつもの徴兵検査で20才のもんを。そうすれば、いつもの年より倍、新しい兵隊を取ることができる。だから急に、壮丁検査というものを作ったんや。」

日本の戦況がどんどん悪くなり、兵隊もまったく足りないという状態でした。

同じ19才で、特別幹部候補生に志願し、試験を受けました。



▲写真2 松原<sup>たもつ</sup>さん

### 〈徴兵検査〉

昔、日本国民には、20才になると兵隊になる義務があった。その時、健康診断をして、丈夫な人から甲、乙、丙、とつけられる。この診断のことを「徴兵検査」という。

「落ちた。19才のもんはみんな落ちた。せやけど、17・18才のもんはみんな受かりよった。17才の弟も受かった。決まっている人数の中で19才を取るよりかは、それより下のものを取るほうが、結果的には兵の数が多くなる。19才のもんは壮丁検査で絶対、兵隊になるからな。」

陸軍の特別幹部候補生や、海軍の海軍予科練は、昔の少年たちの憧れの的でした。

壮丁検査では、第1乙種でした。

「甲種になるには条件があつてな、身長150cm以上、体重が身長<sup>の</sup>3分の1、胸囲が身長<sup>の</sup>半分以上でないとあかん。わしは体重が2キロほど足りなかった。別に特別やせてはいなかったのにな。でも、体重が500グラムほど足りないということであれば、その場で水を飲ませ、甲種合格にする。1人でも多く甲種にした方が都合がいいからな。」

### ② 空襲

昭和20年6月のある日。警戒警報が鳴りました。お父さんは警防団員だったので出かけてしまい、一人で家にいました。他の家族はみんな疎開していませんでした。しばらくすると、警戒警報が空襲警報に変わりました。焼夷弾などが雨のように降り注ぎ、鍋の底を力いっぱい連続してたたいたような音がなり、まるで地震のように地面がゆれました。

「アメリカのB29は1万メートル以上飛んで、腹にも銃がついていて、自由に動くから、日本の飛行機はそばにも寄られへん。」

「アメリカに焼夷弾を落とす。なぜなら、それを落とすと油脂がちらばって、まわりの物に火がつき、燃え上がる。それで、日本の家は木造やから、すべてが燃えつきるまで、火は消えへん。」

空襲は続きます。家の中でじっとしていたら、ガラス戸が割れて、目の前に落ちて来たのでした。

爆弾の音が終わると、家で唯一の金目の物だった時計とはちみつをそれぞれ箱とびんにつめ、それを荷台にのせて大阪駅前に逃げました。途中、電柱の所に真っ黒こげの死体があって、警防団員が持ったら、ずるっと全身の皮がむけてしまいました。

「そんなのがそこらじゅうにあった。まるで地獄だ。」

### 〈特別幹部候補生〉

読んで字のごとく、未来の幹部になりそうな人、ということである。

兵隊にも位があり、この試験に合格すると、普通の徴兵検査を受けた人より5段階も上の位から軍隊に入れる。この差は大きく（少なくとも2年のハンデ）合格した人の出世は約束されたも同然である。

### 〈志願〉

試験があり、合格すれば、陸（海）軍士官学校で訓練する。



▲図4  
アメリカのB29



▲図5 灯下管制

③

戦中、何かの病気だからと、隔離されて、働かされたことがありました。そこは、軍隊と同じような感じで、同じように厳しいのです。

起床と集合の時刻が決まっています、その通りに動かなければいけないのですが、その間は非常に短く、ゲートル（左図）もきちんと巻かせません。

「そういう時はな、起床時刻の前、見張りが通りすぎたら、こっそりゲートルを巻くんや。そして、もう1回寝る。すると、誰よりも早く集合でき、上官にほめられる。まじめにやったら怒られるだけやで。もちろん、見つかったらあかんけれどな。」

又、弾なしでの銃の練習もありました。その時、まじめにきちんと狙って撃てば、「何もたまたしてる！」と、どなられたり、殴られたりする。けれど、ちっとも狙ってなくても、格好よくすれば、上手だととてもほめられたりしました。



▲図6 戦中の服装（男性）

やっと帰れる日となり、解散前にいくらか市場で買い出しする時間を与えられました。その時、友達と2人で大根をたくさん買いました。

「ちょっと買いすぎて、案の定、昼食の時間に遅れてしまった。わしら以外の奴も、たくさん遅れて来た。けれど、わしらはな、帰ってきてすぐに上官へ大根を渡しに行った。すると、わしたちだけは怒られないで、昼飯を食べることができた。けど、他の奴は昼抜きや。」

「何事も要領よくやらなあかんねん。まじめにやっていたら、よけいにばかを見た。あの時代は、要領よく上官に気に入られた奴が出世するねん。」

④ 戦争終結

空襲の後は、時計を売って暮らしていました。軍隊では時間を絶対に守らなければいけないので、買う人はいくらでもいるのです。

「阪急のえらいさんと知り合いやったから、缶詰などを横流ししてもらった。もちろん、代金は払うけどな。」

空襲の時、持って逃げたはちみつは近所の人にあげました。

昭和20年8月15日。長かった戦争が終結しました。松原さんの入隊予定は10月でした。

「もし入隊していたら、航空機の整備をやっていたと思う。時計屋やからな。戦争に行かなくて運が良かったかもしれへんけど、乙種になると近所の人に白い目で見られるんやで。」

松原さんは、出来事を淡々と語って下さいました。自分の感情は表に出さずに。でも、それが「あなたならどう思いますか？」というメッセージであったような気がします。

—妻 節子さんのお話—

◎戦中の食事

〈朝ごはん〉

- ・おかゆ
- ・さつまいものつる（おいしい）
- ・大豆をつぶして乾燥させたもの（配給）

〈主食〉

- ・ぞうすい
- （中身）ふすま（小麦を粉にするのでできる皮のくず）とめりけんこを練って団子にしたもの。
- 南京（かぼちゃ）

- ・みそ汁
- ・さつまいも、じゃがいも

〈おやつ〉

- ・べっこうあめ
- ・さつまいも



▲図7 戦中の服装（女性・子供）

IV 考察

明確に比べることはできませんが、まとめてみました。

	乗 鞍	大 阪
徴兵検査	これは全国どこでも同じように厳しく行われていたようである。	
食料	配給制であったが、山なので、他に食べるものがなかったので、困らなかった。	かなり不足していて、配給も少なく、大変だった。
危険度	空襲もまったくなく、警報もほとんどなかった。	空襲があり、いつも死と隣り合わせ。
危機感	軍隊にいる人はいつ死ぬかわからないが、他の人はのんびりしていた。	軍隊に入っても、普通に生活している人もいつ死ぬかわからないという恐怖。
軍隊の進入度	場所的に進入される。 (例) 訓練所・滑走路など	労働させられることが多い。
世間の目	どちらも、乙種だと白い目で見られた。	
軍の指示	軍の指示は全国どこでも浸透していた。	

大阪と乗鞍の違いは、重要な工場や指令部のある都会と自然がたくさんあり、未開発の土地がある山の上との違いであるようです。

## V 総括

とても長ったらしい文章となってしまいましたが、一生懸命語って下さった人のことを思うと省くことができませんでした。読みづらいことお詫び申し上げます。

今回、初めて戦争体験者の生の声を聞きました。今まで、本は結構読みましたが、やはり実世界のこととは実感していなかったと思います。遠い昔のことだから、と。けれど、若い人みんながそう思ってしまい、戦争体験者がいなくなってしまうたら、もう一度戦争を（しかも核戦争を）起こしてしまうかもしれません。というか、その可能性が大きく、近未来の最大の問題と今日も騒がれています。それを未然に防ぐには、すべての年代、国の人たちが、戦争の恐ろしさをむごさを知ることが必要ではないでしょうか。

ところで、新聞記事を読んでいると、「アメリカで原爆展を開くことに大勢の人が反対をし、中止された」というものがありました。この記事を見て、日本人は「なんてアメリカは勝手なんだ。」と思うことと思いますが、考えてみて下さい。日本で南京大虐殺をはじめとする、日本軍がアジアの人々に対して行ったむごたらしい侵略の展覧会を開くとしたら……。公に反対することはしないかもしれませんが、見るのにとっても勇気がいると思います。特に、軍隊経験者にとっては。

だから、「日本は被害者だ」と強調する前に、加害者としてもう一度過去をしっかりと見据えてみましょう。それで、もし、アジアの人たちに戦争の責任について問われたら、「私は知りません。関係ありません。」ではなくて、1人の日本人としてしっかり自分の思いを述べてみましょう。そういうことが、今、必要なのだと思います。

難しいことを書きましたが、これを読んで、少しでも戦争のことを、過去の悲劇を自分なりに考えてもらえれば幸いです。